Action for Butterflies
チョウの舞う豊かな自然を将来へ

独自の進化を遂げた多くの固有の動植物が生息・生育する小笠原諸島。チョウでは、オガサワラシジミとオガサワラセセリの2つの固有種が知られています。2011年6月には、世界自然遺産に登録されました。本誌5号（2006年）で特集したオガサワラシジミについては、その後も様々な主体によって、保全の取り組みが継続的に進められています。5号での特集以後の状況について、ご紹介します。

●見晴らしのよい場所で占有行動をとるオガサワラシジミのオス
オスは通常、発生場所の周囲で占有行動をとり、他のオスが訪れるとぐるぐる回転しながら舞い上がっていく。

●オオバシマムラサキに産卵するメス
食樹はコブガシ類(3～4月頃)、オオバシマムラサキ(5～2月頃)で、オオバシマムラサキへの依存度が高い。

●オオバシマムラサキの蕾を食べる終齢幼虫
幼虫は日中盛んに餌を食べている。幼虫の色は餌の色とよく同化しており、見つけることはかなり難しい。

●在来種オガサワラトカゲ
オガサワラシジミの生息地でも見られるが、地表近くで活動する点が、主に樹上性の外来種グリーンアノールと異なる。

保全対策が進み生息状況が改善しつつある小笠原固有種、オガサワラシジミ

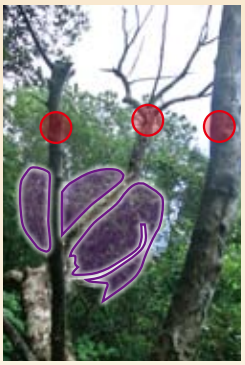
オガサワラシジミの主な減少要因は２つあり、ひとつは外来トカゲであるグリーンアノールによる捕食、２つ目は外来植物であるアカギやシマグワなどの繁茂による食樹の減少です。これらの悪影響を低減し、生息状況をより安定させることが課題となっています。

グリーンアノールについては、環境省の事業で、オガサワラシジミの発生している場所での侵入防止柵の設置および粘着トラップによる捕獲が行われており、島全体からすると面積的にはわずかですが、対策が進められています。グリーンアノールは、チョウだけではなく多くの固有昆虫（トンボ類、甲虫類、ハチ類など）を絶滅させつつあることから、本来は全島から駆除することが望まれますが、現在は局所的な駆除にとどまっています。

外来植物の駆除による植生の回復は、環境省や林野庁

外来植物対策

●アカギに被陰され、花が咲かなくなっているオオバシマムラサキ
母島ではアカギが広域に侵入している。在来樹種よりも樹高が高くなり、繁殖力が強く、成長も早いことから在来植物を駆逐してきた。すでにアカギの純林になってしまったエリアもある。この写真●のオオバシマムラサキは樹高が約8mあるが、アカギ（写真内●印）によって被陰され、枯死する寸前となっている。



●アカギの駆除によって開花状況がよくなったオオバシマムラサキ
オガサワラシジミは現在、母島でのみ確認されている。この場所周辺では、2010年に林野庁によってアカギ（写真内●印）の駆除が行われた。その結果、被陰され開花していなかったオオバシマムラサキ（写真内●印）が開花するようになり、オガサワラシジミの産卵も確認されるようになった（2012年9月撮影）。

●オガサワラシジミの保全を目的としたアカギの駆除
食樹であるオオバシマムラサキの減少を防ぎ、生育環境を改善するため、一部の場所ではオオバシマムラサキを被陰しているアカギの駆除を優先的に実施してもらっている。この事業は林野庁によって行われたもの。

●薬剤注入によって枯死したアカギ
薬剤を注入すると、1ヵ月程度で葉が落ちて枯死し、その後は少しずつ枝が落ちて朽ちていく。伐倒によって駆除すると、幹が倒れる際に他の植物にダメージを与える可能性があるが、薬剤による駆除はそうした点でもよりよい方法といえる。

●上から見たアカギ駆除エリア
オガサワラシジミが時折観察されていたが、アカギによって食樹コブガシなどの在来植物が駆逐されつつあった。当協会の提案により2009年に環境省事業の一環としてアカギの駆除が行われ、コブガシの開花状況もよくなり、オガサワラシジミの発生状況もよくなっている。

グリーンアノール対策

❶母島の新夕日ヶ丘に創られたグリーンアノール排除区
2008年、環境省事業でオガサワラシジミを含めた在来昆虫の保全をはかるため、約2haのエリアが柵で囲われた。外部からのグリーンアノールの侵入を防ぐとともに、柵内ではトラップで徹底的に駆除した結果、個体数は大幅に減少している。ハハジマヒメカタゾウムシなど在来昆虫の回復が確認されている。オガサワラシジミが確認されていたことと、道路に面して柵の設置が容易なことから、この場所が選ばれた。

❷グリーンアノール排除柵内に植栽されたオオバシマムラサキ
柵内でオガサワラシジミの発生を増加させることを目的として、 環境省および地元の「オガサワラシジミの会」によってオオバシマムラサキが植栽され、管理が行われている。その結果、オガサワラシジミが確認される頻度が増加しつつある。

❸グリーンアノール
北アメリカ原産で、小笠原諸島がアメリカ統治下の時代に侵入したとされる。現在は、有人島の父島と母島で見られ、推定個体数はおよそ数百万個体。すべてを駆除するのは困難であり、現在は他の島へ新たに侵入しないよう、港付近での駆除を行っているほか、島民に注意を喚起している。

❹オガサワラシジミの発生場所で行われているグリーンアノールの駆除
ゴキブリホイホイのような粘着シートのトラップが設置され、重要な発生場所での保全対策が継続して行われている。トラップ設置エリアではグリーンアノールの密度が低くなるものの、メンテナンスの手間などから、なかなか範囲を拡大することができないという課題がある。

によって重点的に進められています。アカギは再生能力が高いために、伐採するだけではすぐに萌芽して伸長してしまいます。そのため、周囲の樹木への影響や環境への負荷が比較的小さい、薬剤注入による枯殺が行われています。この技術開発によって、駆除が効率的にできるようになりました。もちろん、他の動植物への影響も考慮しながら進められています。

当協会では、環境省の事業の一環で、年に3回程度、オガサワラシジミの発生状況や生息環境に関する継続的な調査を行うとともに、生息状況の早期の回復を目指して、保全対策の提案および働きかけを行ってきました。これにより、例えば、アカギの駆除がオガサワラシジミの食樹が集中している場所で優先的に進められる場所も出てきました。その結果、アカギの駆除前には利用されていなかった食樹でも、産卵行動や卵・幼虫が確認されるなど、生息環境が顕著に回復してきています。

以上のような取り組みによって、2005年以降、少しずつですが、生息状況は改善しつつあります。今後、当協会では、母島内でのより広いエリアにおいて生息環境を復元し、安定した個体群を創出することを目的とした保全計画を策定するとともに、多くの関係者とともに推進していきたいと考えています。